

十二月の扇 (臘扇) —無用なる我の発見— (後半)

記念講演 毎田仏教センター所長 羽田 信生先生

2013/09/18

なまんだぶつ、なまんだぶつ、なまんだぶつ、なまんだぶつ...

この歴史ある南御堂に、別院に、ご招待を賜りまして非常に光栄なることと思っておりますけども、ここは20年、あ、30年になりますね、30年ほど前に大谷大学に2年間お世話になったことがあるんですけども、その時ここへよくお話を聴きに來たんです。大谷大学の先生、寺川先生を、あるはね、広瀬先生とか、そういう方がお話されるときに僕はそちらへ座ってね、お話を聴いたんですけども、まさか自分が反対方向を向いてですね、皆さんにお話をするようになるなんてことは夢にも思ったことなかったんですけども、3年前にここにはじめてね、ご招待をいただいてお話をさせていただいて、今回もね、またお話をさせていただくわけで、ここへ来ますと大谷大学の先生方ですね、思い出されるんですね。もう何人か亡くなられてますけどね。まあ、そういうことをね、思わずとおれませんけども。

では、後半のお話に入れさせていただきたいと思います。休憩の前には内省の大切さということをお話するために、釈尊と清沢先生の体験のお話をさせていただきました。私達が普段勝手に考えている自分・自己と、真の自己の違いということをお話させていただきました。日頃私達は、自分が、自分がですね、自分の中に何か変わらない、こう「核」といいますかね、実体があると思ったり、自分の中に何かこの良いものですね、重要なものがあるというように思ってますけども、釈尊も清沢先生もそんなものですね、実体、あるいは変わらない重要なものですね、そういうものは一切ないんだということを私達に教えてくださるわけです。そして、もし私達が自分が勝手に考えている自己の虚しさに気づいてですね、本当の自分を発見したならば、私達は大いなる世界、広々とした世界に生まれる、大きな世界に解放されるんだということを私達に教えてくださるわけです。

では、これから、後半のお話としてですね、今までお話したことを具体的な例を出してさらに説明させていただきたいと思います。これから、私の昔見た映画、一つの映画についてお話させていただきたいと思います。そして、その後で西村英雄さんという人の体験について語りたいと思います。この映画と西村英雄さんの体験ということは、今までお話してきた釈尊と清沢先生の教えの深い意味を僕に教えてくれたものです。ですから、皆さんにもお話したいと思ってるわけです。

今お話(した)、先ほどお話した釈尊の「縁起」という教え、あるいは清沢先生の「臘扇」という言葉ですね、これを僕が、私が聞くときですね、10歳の頃に見た一つの映画を思い出します。私は第二次世界大戦が終わった翌年の1946年に生まれました。その戦争のあとですね、10年間ほど日本人は戦争に関するいくつかの映画を作ったと思いますね。そして、それらの映画の中の一つの

映画がこの映画ですね。戦争に関する映画です。その映画についてお話ししたいと思うわけですね。この映画は、僕は10歳くらいだと思いますけども、非常に強烈な影響を僕に与えたんで、今でも覚えてます。映画の題(?)は残念ながら覚えてないんですけどね。しかし忘れることのできない映画です。

これはどんな映画かといいますと、南太平洋の孤島で亡くなった日本の兵隊さんたちの幽霊についての映画です。その物語は、映画の物語はどんなものかといいますと、戦争が終わってそれほど経たない頃、死んだ兵隊のお化け、幽霊が集まって、日本へ帰ることを決めるんですね。その映画は、ですからこの映画の最初のシーンっていうのがね、この南太平洋の島から汽車がですね、これはお化けの汽車ですから透き通っているわけです、これが、太平洋を超えて旅行している場面から映画が始まるわけですね。そして、日本に向かっていくわけですね。そしてやがて、その列車はついに東京駅についてその死んだ兵隊さんたちは、その列車から出てくるわけですね。彼らはずいぶんこの母国に帰って来たってんでね、非常に喜んでるわけです。そして、この映画はその幽霊の何人かの体験ですね。我が家に帰る体験についての物語ですね。

それはいくつかの物語がある(んですが)、他の物語は覚えてないんですけども、一つの物語だけ僕は覚えてる、鮮やかに覚えてるんですけども、それは一人の若い兵隊さんについての物語です。彼を仮りにAさんと呼びましょう。それでAさんは戦争に行く直前にこの結婚したわけですね。まあ、一年ほど前に結婚して、Aさんは戦争に行ったわけで、それで戦争の間中ですね、Aさんは奥さんのことを思ってるわけですね。今そのAさんがですね、その幽霊が家に帰って来る。そして、もう彼はもう嬉しいわけですね。旨がわくわくしてたまらないわけですね。そして、Aさんが家に来て家のもう入っていくわけですね。そうすると、そして家の中に入ってくわけです、そうすると、見覚えのある家具とかね、そういうものがあるわけですね。そして、台所まで行くと奥さんね、彼の奥さんがいるわけです。そして、Aさんは嬉しくてね、彼女に話しかけるんです。しかしお化けだからね、彼女に聞こえないわけですね、声が。それから、このAさんはですね、いろんな家にあるものを見るとですね、いままで見たことないものがあるわけですね。そこにはその、男物のね、靴とかシャツとかズボンがあるわけです。彼はこれ見てね、「あれ？これ俺の靴やシャツじゃない。男が家に住んでんだらうか？」ってこういう風にね、考えるわけです。

そうすると、少し経ってですね、一人の男がその家に入ってきます。これはBさんです。で、BさんはAさんが生きていた時、Aさんの親友だった人です。それで、Aさんは考える。「なんでA(Bの間違い)がこんなところにいるんだ？」ってこうね、考えるわけです。それでBさんは家のベルも鳴らさないでですね、家の中にズカズカと入ってくるわけです。そして台所にいるAさんの奥さんのところへ行くわけですね。そうすると、Aさんの奥さんはですね、「あ、あなた、仕事からお帰りになったの」って言うわけです。それで、ここですね、Aさんは自分の妻とBさんが結婚しているということを知るわけですね。これはAさんにとって大きなショックと言いますかね、驚きです。なぜなら、Aさんが生きてたとき、Aさんの奥さんはですね、Bさんを嫌ってたんです。ですから、Aさんはね、驚いて、こう言うわけです。どうしてあいつがBと結婚したんだ。俺が生きてた時、俺がいつもBを家に招待したいと言った時、あいつは俺にくBさんご招待しないで。私、Bさんが嫌いなの。Bさんがいると私、とっても不快感感じる。だからBさんを家に呼

ばないでください>と彼女は言ったわけですね。ですから、Aさんは非常に驚いた。今このBさんと奥さんが結婚しているということは、Aさんには考えられないわけですね。しかし、この二人はね、とても仲の良い、いい夫婦に見えるわけですね。そして彼らは親しげに語り合っているわけです。そして、Aさんがこう耳を傾けるとですね、彼の奥さんとBさんがAさんについて話してる。自分自身について話してるわけです。それを聞きますと、Aさんの奥さんはBさんにこう言うんです。「Bさん、私あなたが大好きよ。私、あなたと結婚して大変よかったです。死んだ人についてこんなこと言うのはいけないけれど、本当のこと言うと私はAさんと結婚して一緒になったけれども、彼はあんまり好きじゃなかったの(会場笑)。一緒にいてもあんまり幸せじゃなかったの。私はAさんと暮らしていた時でさえ、私はAさんよりあなたの方が好きだったのよ。だから私はあまりAさんといて幸せじゃなかったのよ。」と言うんです。そうすると幽霊のAさんが、この奥さんの言ってることを聞いてですね、もう驚いてですね、「くそ！」とかね「アマ！」ってこうね、叫ぶわけです。彼はもう彼女を殺そうとするわけだけど、お化けだからね、殺せないわけですね。それで、自分は死にたいって思うわけだけど、もう死んでるからね、また死ぬことはできないわけですね。

それで、もう頭に血が上ってですね、それで、怒りにいっぱいになったAさんは、この家の外に飛び出すわけです。それで、「ひどい！こんなひどいことはない！もう俺はこんなとこにいられない。幽霊の列車に帰った方がいい！」って言って、まあ幽霊の列車の方へ帰っていくわけです。すると、幽霊の列車に行くそうですね、驚いたことにAさんは多くの幽霊がですね、皆んなその列車に帰ってきてるわけですね。ですから、Aさんは他の幽霊に聞くわけです。「皆さんどうしてここにいますか？皆さんどうしてそんな悲しそうな顔してるんですか？家へ帰って楽しくなかったんですか？」っていう風に尋ねるんです。それに対して、それらの、そこにいる幽霊たちはですね、「Aさん、わしら喜んで家に帰ったんだけど、わしらの家族のみんながわしらのことをすっかり忘れてるんですよ。皆立派にわしらがいなくても暮らしています。もうわしらの居場所はないんです。彼らはわしらを必要としないんです。」という風に言ったわけですね。そこで、この幽霊たちが話し合ってますね、「この世界はわしらのいるところじゃない、この世界から去った方がいい」という風に意見が一致したわけですね。そして、みんな幽霊の列車の中に入ってですね、その列車がですね、今度は、映画が始まった逆ですね、この同じシーンで映画が終わるんですけどね。列車がこうね、反対方向に戻っていく。それがね、強烈なイメージで残ってるんですけどね。

今この映画のお話したんですけど、ある意味で非常に喜劇的な、コミカルなね、映画ですけども。私達は単にね、この映画を笑って済ますことができないんだと思いますね。僕はこの映画のことを思うとなんかゾッとするって言いますかね、寒気を感じます。なぜならこの映画はですね、この真理ですね、恐ろしい真理、冷たい真理を私達に教えているんじゃないかと思います。私達は、ひとつの疑問が出るわけですけどね、私達はAさんとどこが違うんだろうか？私達は这个世界において、何か実体のあるものとして確固たる何者かとしてですね、存在すると思ってるんですけども、実際そうでしょうか？ある意味で私達はみな、このAさんのような存在じゃないでしょうか？お化けのようなものとして存在しているんじゃないでしょうか？この映画は私達の存在において、覆い隠されている、深く覆い隠されている真理を私達に見せてくれるんじゃないかという風に思いま

す。私達が自分の中に変わらない何かを、核のようなものを持っていると信じていますけれども、私達は実際そういうものは持ってないわけです。私達は自分がこの世で重要な不可欠な存在であるという風に考えていますけれども、考えてみたらどうでしょうか？私達は実際そういうものは持ってないものだと思います。

この日本へ帰ってきた幽霊についてのこの映画はですね、私がアメリカから日本へ帰る体験とこう重なり合うんです。この映画の、僕はですね、私はときどき日本に帰ってくるわけですが、私が日本へ帰るときはいつでも、あたかも自分がこの映画のお化けであるような、そんな感じがするわけです。私は40年間アメリカに住んできましたので、先ほども言いましたけれども、今日本に帰ってくるのが外国に来るような気持ちになります。ですから、私にはもはや日本に「私の場所」ということのできる場所はないと思うわけですね。私の親戚とか友人たちはみな私無しにですね、私の人生となんの関係もなしに、彼らの人生を生きているわけです。ですから、私は日本へ帰ってくるとあたかも自分が幽霊であるような気持ちになるわけですね。その映画の中のAさんのような感じがします。私が40年以上前に日本に住んでいた時、私には「自分の場所」と言えるものがあったわけです。そこで自分が重要であるという風に感ずる場所があったわけです。しかし、日本で40年前あったそのような場所を今日本で見つけることはできないわけです。約40年前私は、日本に「私の場」というものをもってたわけですね。しかし、どこを見つけてもですね、私の場所というものは、もうどこにもないわけです。

私が日本に私の場所を、私が重要であると感じることのできる場所をもはや見つけることができないうことを、私が知る時ですね、次のようなことを思います。「40年前に私は本当に日本に私の場所を持っていたのだろうか。私は40年前に本当に私は自分の場所と思えるものをもっていったのだろうか。私が重要だと思ったのは、私自身が重要だと思ったのは、幻想ではなかったか」と思わずにはおれないわけです。その映画の中の幽霊は、この世界にもうなんら場所をもっていないことを学んで、ショックを受けました。Aさんが生きていた時、彼は彼の妻にとって重要で不可欠の存在であるという風に思っていたわけです。ところが今、彼が死んだ後、彼は自分が思っていたほど、そんなに自分が重要ではなかったということが分かったわけですね。彼が考えた自分の重要性はすべて彼の幻想であった、ということに気づいたわけです。

日本において、私自身の存在の虚しさを感じるとさらに、次の問いを僕自身問わずとおれないわけです。その問いはこのようなものです。「私は過去40年間アメリカで暮らしてきたけれど、私は本当に私の場所と言えるものを持っているのだろうか。米国で自分が重要と考える仕事を僕が、私がしているということは事実です。しかし、米国に私の場所と言えるものがあると考えerことは幻想ではないのか。私は自分自身の本当の姿を見ているのだろうか。私が自分を重要と考える思いは、幻想ではないのか。私は私自身を過大評価しているのではないか」ということを問わざるをえないわけです。私達がこの世に存在している、この根本的な実相に関する限り、私達は幽霊のAさんとさほど変わりはないものじゃないかということをおぼろげに感ずるをえませんが、私達は自分が不可欠な存在であるという風に確信しているけれども、私達は私達が考えるほど重要でも不可欠でもないのだと思います。

こんなことを言うのはたしかに大変ひどいことと言いますかね、たいへん冷たいことです。しか

し、これは釈尊が悟られた真理だと思います。釈尊が無我という言葉でですね、無我という言葉で、自己の真相を表現しておられます。釈尊が私達が持っていると考えた独立した自己、あるいは重要な自己というものは幻想であるということを私達に教えておられます。私達はすべての物事や人々、色んな物を支配する能力を持っているという風に考えますけれども、事實は、「縁」がですね、「縁」が物事や人々を支配することを私達に可能にしているわけです。すべて条件、「縁」というものが私達の生活を左右しているわけですね。例えば、私達がいいことをしてね、いい業績を果たすと、「俺はやった！」という風に考えてですね、高ぶった気持ちになることがありますけども、しかしですね、「自分がしたんだ」というそういう思いはですね、やはりそこに縁起に対する無知があるわけですね。真理の、縁起の立場からみるとですね、私達が、俺がこの仕事やったんだっていうことはね、言えないわけです。あるいはまた、悪いことをしたときにね、「なんで俺はこんな悪いことをしたんだろう」と言っただけでね、憂鬱な気持ちにこう沈むことがありますけれども、しかしそれもですね、真理の立場から言ったらですね、根拠の無いことだという風に言っただけでいいわけですね。

今このお話したお化けの話というのは、私達がどのように存在しているか、というその存在の仕方ということをお話してくれると思います。なんか私達の顔に冷たい水をかけてですね、私達に「自分の真相に気づけ！」「自分の分限を知れ！」ということをお話してね、私達に語りかけられているんじゃないか、ということをお話します。

で、ここで次にですね、もう一つお話ししたいことがあります。これはやはり清沢先生の教えを僕に、私に教えて下さったことなんですけども、この西村英雄さんという人についてお話ししたいと思います。多分皆様はこのお名前をお聞きになったことないと思いますけども、今から15年以上前に、日本の友達がですね、NHKの『心の時代』のビデオを送ってくれまして、そのビデオの中の一つがですね、この西村英雄さんについての番組だったわけです。

西村英雄さんは1919年に生まれて、2005年に亡くなられておられます。そのNHKの『心の時代』の番組で、西村さんがインタビューされたときは、たぶん70の半ばだったんじゃないかと思っています。西村さんはクリスチャンで、当時精神障害者のヘルパーをされておられました。西村さんがどのような経歴を持っているかということをお話しますと、この若い学生時代に、東大で矢内原忠雄というクリスチャンの先生の影響を受けてクリスチャンになったんです。矢内原忠雄という人は、内村鑑三のお弟子さんで、記憶がはっきりしませんけども、東大の学長をされた人じゃないかと思っています。西村さんは大学卒業後、陸軍に入って、満州で生活されました。そして、敗戦後は日本に帰り、東大の教授になった、そういう経歴を持った人です。そのNHKの番組の中で、西村さんは、自分の人生に大きな影響を与えた3つの言葉について語られたんです。まあ、自分の人生を変えた3つの言葉について語られました。

まず第一の言葉は、西村さんの次男の人の言葉ですが、そのことについてお話しします。それは1960年代の終わり頃ですね、西村さんが東大教授をされていた時のことなんですけど、1960年代の終わりの頃というのと、ベトナム戦争や学生運動がピークの時代ですね。僕もこの学生でしたからね、1969年ですかね、僕が大学を卒業したのは。僕は東京外国語大学というところへ通ってたんですけど、当時、東大と教育大とそれと外国語大学がですね、閉鎖されまして、一年間ですね、クラス

がなかったんです。一年間ひとつもクラスがなかった。そういう時ですね。だから僕はこの時代のことをよく覚えてますけどね。まあ、その頃僕はね、まあ戦国時代みたいで、その頃僕は仏教に入ったんです。だから世界的なね、混乱状態も心理的に作用してたんじゃないかと思います。僕は在家ですからね、最初は西洋文学とかね、西洋哲学とかそういうものに興味があつてね、仏教には一切興味がなかったわけですけどね。しかし、まあいろんな個人的なね、理由もありますけども、社会的な理由もあつて、その頃ですね、僕は仏教を学ぶようになったわけですけども、その当時ですね、学生運動がピークだった時に、西村さんは学生部長をされていたわけですね。それで、学生部長というのは、教授を代表して過激派の学生と交渉する仕事をする人のことを言うわけですね。それで、学生部長としてですね、毎日西村さんは学生と話し合いをしていたのです。それで、西村さんには二人の息子さんがおられて、その次男の息子さんは学生運動をされていたんです。そして、ある夜、その次男の方と西村さんが、まあ話し合われたんだそうです。それで、西村さんは自分は学生の心がよくわかるという立場で息子さんに話をしていたのだそうです。そして、その時ですね、突然息子さんが西村さんに向かって、「お父さん、僕のところへ降りてきてよ。お父さんて観念的だなあ」って言ったんだそうです。「お父さん僕のところへ降りてきてよ。お父さんて観念的だなあ」って言ったんだそうです。その時、西村さんは、さほどその言葉に気を止めなかったのです。ところが、その翌日、その息子さんが自殺してしまったのです。その自殺を知った時、西村さんは自分の息子の心がわからなかった悲しみを深く感じたわけです。それと同時に、息子さんの「お父さん僕のところへ降りてきてよ。お父さんて観念的だなあ」という言葉が大切な言葉として思い返された、と言うのです。西村さんは自分が学生部長であるという誇りを持って、息子さんに上から語りかけていたんだなあということを思わずとおれなかったのです。

では、次に西村さんに強い影響を与えた二番目の言葉について語りましょう。西村さんの息子さんが自殺されて、西村さんが大変苦しんでいた頃、クリスチャンの友人が西村さんにお手紙をくださって、そのお手紙の中で旧約聖書の中にある一つのことばを書かれたと言うのです。その聖書の言葉というのは、「大地の塵に唇をつけよ。さらば希望、望みあらん」という言葉であったのです。「大地の塵に唇をつけよ。さらば希望、望みあらん」という言葉ですね。この言葉も西村さんの胸を強く打ったと言うのです。

では、次に西村さんを変えた第三の言葉について語りましょう。息子さんの自殺以後、西村さんの奥さんの二人は躁鬱病に罹って、精神科医のケアを受けるようになりました。そして、精神科のクリニックに二人とも入るようになりました。このクリニックの建物は2階建てで、上は男性の病棟があつて、下には女性の病棟があつたのです。ですから、西村さんは二階の病棟に入り、奥さんは一階の病棟に入ったのです。そして、そのクリニックでは、二階の男性患者は一階の女性患者と話をしてはいけないという決まりがあつたわけです。そんなある日、西村さんは奥さんに伝えなければいけない伝言があつたので、二階から一階に行つて奥さんと話していたんだそうです。そこに一人の看護婦さんが来合せて、二人が夫婦であるということを知らなかったんですね、その看護婦さんは、ですから、大声を張り上げて「あんた何してんの、駄目じゃない！」って大声でですね、西村さんに向かって怒鳴つたのです。あたかも親がですね、小さな子供を怒鳴るように大声で怒鳴つたのだそうです。その時感じたことを西村さんはインタビューしている人にこう語つたの

です。「看護婦さんがそう怒鳴った時、私は落っこちてしまいました。大地に落っこちてしまいました。そして、気持ちが楽になりました。」西村さんがそう言った時、インタビューしているアナウンサーは、西村さんの言っていることが全然わからないわけですね。で、困惑して西村さんに尋ねた。「西村さん、それどういうことですか？落っこちてしまいました。大地に落っこちてしまいました。そして、気持ちが楽になった。西村さん、それはどういうことですか？」と尋ねたんですね。それに対して西村さんはこう答えたんです。「看護婦さんが私にそう言った時、私は最初はむかつきました。大学教授である私になんというものの言い方だとむかつきました。がすぐに私はそうだ、そうだ、私は一介の精神病患者なのだ。規則を破っている精神病患者なのだ。それ以外の何者でもないのだ、という風に気づきました。それまで私には大学教授としてのプライドがありました。看護婦さんは私を一介の精神病患者として見ていたのです。そうだ、私はそれ以外の何者でもないのだ。そうはつきりと知った時、そうはつきり知った時、私は気持ちがすっとしました。肩から重荷が降りました。大きな解放感を体験しました。私が私となりました。」このような体験をした西村さんは、その病院を出て大学の教授の職を辞して、精神障害者のヘルパーという仕事をされるようになったのだそうです。

このように、西村さんはこの3つの言葉が彼を変えたと言われるのです。まず最初は息子さんの「お父さん僕のところへ降りてきてよ。お父さんて観念的だなあ」という言葉。次に友人が書いてくれた言葉、「大地の塵に唇をつけよ。さらば望みあらん」という言葉。第三は看護婦さんの「あんた何してんの、駄目じゃない！」という言葉。これら3つの言葉が重なりあって、西村さんを高みから突き落としたわけですね。社会人としての高みから、あるいは精神的な高みからですね、大地へ西村さんをたたき落としたわけですね。西村さんが大学教授としてのプライドを持っていた。あるいは、クリスチャンの宗教家としてのプライドを持っていた。そのようなプライドを徹底的に打ち砕いて西村さんを大地に突き落としたわけですね。そして、西村さんは自分が「ただ人」である、愚かな一人の人間であるという自己に目覚めたわけです。そのことを西村さんは「私が私となった」という言葉で表現されたわけですね。それまで自分が重要な人間である、有用な人間であるという風に考えていたそのプライドがですね、粉々に崩されてしまった。しかし、この体験が西村さんにとっては大きな解放の体験だったわけですね。重い荷がですね、西村さんの肩から落ちたわけです。

僕は西村さんのこのテレビの番組を見てですね、まず心に浮かんだことは、清沢先生のこの「落在」という言葉と「臘扇」という二つの言葉ですね。清沢先生は『臘扇記』の中で、先ほどの言葉ですけど、自ら問うてですね、「我とは何ぞや、これ人生の根本問題なり」と問われて、その答えとして、「自己とは他なし。絶対無限の妙用に乗托し、任運に、法爾に、この現前の境遇に落在せるもの、即ち是なり」と言われます。「落在せるもの」、大地に落っこちたものであると言われます。このことはまさに西村さんの言われた言葉「私は落っこちてしまいました。大地に落っこちてしまいました」ということと、まったく同じ言葉です。また、清沢先生の「臘扇」という言葉は、自己が無用者であるということ、あるいはいてもいなくても変わりのない人間、なんら重要性を持たない人間であるという、そういう意味を持った言葉です。これはまさに西村さんがですね、聞いた3つの言葉ですね、この3つの言葉がですね、西村さんにこの自己の自覚ですね、「看護婦さんの目

から見たら私は一介の精神病患者にすぎないんだ、そうだ私はそれ以外の何者でもないんだ」というその自覚ですね。これは、この清沢先生の「臘扇」、無用者の自己ですね、これの発見ということと僕は重なるんじゃないかと思います。

さらに、清沢先生は自己の真相をですね、「無用者」あるいは「落在者」と見れる人はですね、この自力の無功なることを知る人である、という風に言われます。そして、自力の無功なることを知る人は、自らの重要性から解放されて、大いなる世界に生まれることができるということを言われます。自分が重要である、自分の自尊心ですね、そういう自分のプライドをですね、打ち砕かれた人は、広々とした、またのびのびとした世界に生きることができるんだ、という風に清沢先生は言われます。西村さんもこの自己の真相を知らされてですね、「自己が自己となった」ということですね、自己がなんら重要な人間でなく一介の精神病患者であると知った時にですね、西村さんは気持ち楽になった、肩から重い荷が降りたように感じた、という風に表現されたわけですね。ですから、この番組を見てですね、僕は西村さんっていう人は清沢先生とまったく同じ体験をされた人じゃないかという風に思ったわけですね。

さらに言うならば、西村さんのこの体験はですね、あるいは清沢先生のこの体験は、親鸞聖人の体験を私に思い出させるわけです。『歎異抄』の中に、有名な言葉で「善人なおもて往生を遂ぐ、いわんや悪人をや」という聖人の有名な言葉がありますけども、その言葉をここで思い出さずにはおれません。ここで言われている「善人」とは何でしょうか。「善人」とは自分を有用、役に立つ人間、あるいは重要な人間だと思っている人のことを言っていると思います。それでは「悪人」とは何か。「悪人」とは自分を無用で、重要でないと思っている人のことだと思います。悪人というのは、先程も言ったように、この高みからですね、宗教的な高み、精神的な高みから落ちこちた人のことですね。そして、大地の塵に唇をつけている人のことを言うわけです。で、親鸞聖人は「善人なおもて往生を遂ぐ、いわんや悪人をや」という、この「往生」ということは「救い」ということですけども、この大地に落ちた人ですね、自分のプライドが粉々に崩されたその悪人こそがですね、広い大きな世界に生まれるという、そういう意味を持っているんじゃないかと思います。いわゆる自分を重要だと思う人も救われるけれども、自分が無用であり重要性を持たないということを実感した人こそですね、大きな広い世界に住むことができるということを実感する、この言葉は表現しているんじゃないかということを実感します。

また、親鸞聖人の有名な言葉「いずれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」という言葉がありますけども、聖人がこの言葉を語られた時ですね、「いずれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」というのは、これはまさに比叡山で、善き人間ですね、善人になろうとしていた努力が破られてですね、大地に真っ逆さまに落ちこちた時の言葉ですね。「いずれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」。この言葉を語られた時、親鸞聖人は自分が骨の髄まで煩惱具足の煩惱(凡夫?)であるということですね、その自覚において、この宿業の大地ですね、塵のまっただ中ですね、大地の塵のまっただ中に深く落ち込んだ自己を発見されたわけですね。しかしこの体験がですね、「地獄一定」の自己を知った体験がですね、大地に落ちた体験がですね、親鸞にとっては大いなる救済の体験でもあったわけです。親鸞聖人は、ですからまあ、この「地獄一定すみか」という言葉の中にですね、大いなるその解放の喜びの叫びを私

達は聞かなきゃいけないんじゃないかということも思うわけです。

そして、さらに親鸞聖人は、この、流罪に合われるわけですね。35歳の時に越後に流罪されたわけですね。そして、これもですね、さらに大地に頭を打って叩きのめされてるわけですね、親鸞聖人ね。さらにですね、越後のいわゆる「田舎の人々」と言いますかね、本当の直人(ただびと)の世界にですね、親鸞聖人は入って行かれるわけですが、親鸞聖人はそこで、本当の「平等の大地」ですね、人間が、衆生がすべてが平等であるという、そうですね、「群萌なる我ら」、私達はみんな雑草のような人間である、ね、「いしかわらつぶてなるわれら」、誰一人として特別な人間はいないんだ、みんな煩惱具足でですね、たまたま「縁」によってね、いろんな仕事とか地位は違うけれど、親鸞聖人は「皆同じことなり」と言いますね、この平等の大地ですね、親鸞聖人はその越後でですね、本当に自己がですね、いわゆる直人ですね、雑草のような我ら、そのところにも転がっているような石ころのような我らという、そういう自覚を持った。これはそうですね、比叡山で高みへ高みへと行った世界は、ある意味で非常に孤独な世界だったんじゃないですか。上へ行けば行くほどですね、煩惱を無くそう無くそうとしていけばいくほど、「孤高」といいますかね、孤立が、高いけれども孤独な世界ですね。しかし、その比叡山のてっぺんから大地ですね、さらに越後のいわゆる直人の世界にね、大地にこう打ちのめされて入っていった時にですね、親鸞はそこに大きなですね、いわゆる広い世界、いわゆるすべての衆生と一つになって生きる広い世界に、親鸞聖人は生まれることができたんじゃないかということも思うわけです。

そういうわけで、お話したことをまとめて言いますと、大切なことはですね、一番大事なことは、私達自分自身がね、私が私をどう見るか、これだけがですね、人生で大切な唯一のクエスチョン、問題なんです。そして、私達がいわゆる苦しみ的人生を生きるか、あるいは感謝と喜びの人生を生きるかということですね、この一つのこと。「私が私自身をどう見るか」ということですね。清沢先生は、先ほど読んだ文章で「全体私ども人間が苦しんだり、悲しんだりするのは、つまり、自分というものを大事がっているからである」という風に言われます。自分がね、私達が自分自身を「大事だ」「重要だ」「善人だ」ということを思うとですね、その思いによってですね、私達は自分自身を束縛するといいますかね、苦しめているわけです。「私自身が私をどう見るか」、これがですね、非常に大事な問題じゃないかということも思います。これは釈尊から始まった仏教の歴史でね、これは私達の先人が一貫して私達に教えてくださっている教えであるということも思わざるを得ません。

そういうわけで、本日はこの臘扇忌にご招待を賜りまして、重ねてお礼を申し上げます。そして、清沢先生の私達に残された最大の遺産というのはこの一つの問いです。「自己とは何ぞや」という、この内省の問いですね。この問い、そして、清沢先生は「私は臘扇である」、「私は落在者である」というその言葉が先生のいわゆる答えであったわけですね。そして、その答えの中に、その悲しさですね、自己が否定された悲しさと、そして大きな世界に生まれた喜びというものが、表現されているんじゃないかということも思います。そういうわけですね、僕はアメリカでも長く暮らしていますが、そしてアメリカに説かれる仏教というものはいろんなものがありますけども、しかしこの清沢先生のね、内省の教えというのは、これこそがですね、私達日本人が誇れる最大のいわゆる遺産であるのではないかということも思います。いつの時代でも、どの国でも、どん

な場所でも通用する普遍的な教えなんじゃないかということを思わざるをえません。そういうわけで、本当に本日はご清聴ありがとうございました。

なまんだぶつ、なまんだぶつ、なまんだぶつ、なまんだぶつ...